
聖なる夜と落とし者っ！

椿 によき

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

聖なる夜と落とし者っ！

【著者名】

Z3583C

【作者名】 椿 によき

椿 によき

【あらすじ】

「ぐく普通な少年のところへ落ちてきた、不思議なサンタ見習い少女。彼女は突然居候すると宣言ーそこから始まる儚い日常と、儚い約束の物語。

プロローグ

悪夢は突然、降ってきた。

にわかキリスト教信者が激増するその夜、とくに何をするわけでもなくクリスマス・イブという行事を流していた少年。彼は十五年間培つてきた常識を、一瞬にして破壊された。さらに儂い常識を叩き壊して居候宣言までしたサンタの少女に、平凡な日常さえ奪われる。それは絶対絶望の状況で、生きていることを悔やんだくらい。

少年と居候は敵対心（別名・殺意）を抱きながらも笑顔で、当たり障りないようにお互いが気を使いながら暮らしつづけたいです。けれど現実、一方的に少年が気を使つてます。誰か助けて！

そんな哀れな主人公の名前は中井斗助。

運動、勉強ともに優秀であり、そしてさらに眉田秀麗という完璧な中学一年生。

もちろん、僕です。

これは、多分正しいと思われていた常識を木つ端微塵に碎かれたあの夜に始まつた、変えられない運命の物語。

それは、そう。十一月二十四日、聖なる日の前夜のこと。

惨劇は（なぜか）幕をあけ（てしまい）ました。

その1つ！ 落下物と色々

今日はクリスマス・イブ。

なんだか物凄く嫌な予感を感じる今、僕の視界には嵐の前の静けさ的な、神秘溢れる世界が広がっている。聖夜前に相応しい澄み切った風に、透明な夜空。そこに浮かぶ数多の星と、ひとつそりと光を放つ三日月が、暗いだけの夜空を優しく彩っている。

冬休みの序盤、僕はまったく進まない宿題を放置、毎日をだらだらと過ごしている。

ふと、終業式以来会っていないクラスメイトのことが頭に浮かんだ。今頃クラスの仲間たちは、各自家族でイブのパーティーとかツリーの飾りつけとかやってるんだろうな。我が家では最近、クリスマスなどの行事を全てやらないままにしている。端午の節句なんて僕が幼稚園を卒園した途端に中止となつた。息子の成長をもつと願えよ！ そう言えば、小学校まではツリーお飾り労働会やらクリスマス会なんかがあつて、放浪癖のある両親がいなくともそれなりに楽しいクリスマス・イブだった記憶がある。

ただの冬休みなのに遠い目をしてどうするんだよ！ 僕！

自分に突っ込み、視線を空へと戻す。そこには相変わらず闇とわずかな光があった。

「あ……」

今、ほんのちよっぴりだけ切なくなつたのは、きっとで夜空がこんなに綺麗だから……というのは嘘で、冬休みも残りあとわずかなのに宿題がなかなか進まないからだ、きっと。少し気分が暗くて重いのは、確実にそのせいだが。

「ふう」「

肺に溜まつた息をそつと吐き出せば、それは真っ白く凍り付いてす

つと闇へ溶け消える。

現在時刻は午後九時半。

まだ雪が降らないこの地域。いつもクリスマス三日前まではイルミネーションが輝いているのに、当日になると一斉に電球が切れる商店街。そしてその代わりと言わんばかりに点滅を開始する街路灯。毎年同じで、いつまでも変わらないこの風景に涙さえ感じてしまう。感じてしまつけれど、そろそろ町を見下ろすのに飽きてきた。

また、闇を見上げる。

視界には、空気が澄み渡つていて夜空がさつきと変わらず広がっている。切なさを混ぜた視線を遠くへ投げれば、薄つすらとした山の輪郭が見えた。今は闇と同化した濃緑の山。午前では見られない新しい木々の姿は、威風堂々としていてとても感動する。風が吹き、思い出したように寒さが体中を駆け、ぶわっと鳥肌を作った。

綺麗な夜空、濃緑の山。なぜかそこに、自然界にはありえない真紅の物体が浮かんでいるけれど、それはそれで素晴らしい！

くない！（否定）全然素晴らしい！

つてかアレは一体なに？

あまり、といふか思いつきり信じたくない光景に、しばらく言葉を失つた。

けれど黙つたところで現実が変わるはずもなく、謎の物体は落下を続行。僕と未確認浮遊物体との間隔は、わずか数十メートルまで縮んだ。

そしてあと三十メートル、二十三メートル、十五メートル

「やつほお
い！」

今のは僕の声ではない。

「ヒーリークロス！ 待ちなさいー！」

これも僕の声ではない。

サンタクロースのような恰好をした女の子は、すでに僕の五メートル前に浮いていた。

「ええっ！ ちよひよちよ、ちよつと待つた！ ……ぐおえつ」

制止を掛けたがすでに時遅し。

重力に引っ張られてきたサンタは、空中でひらりと身を翻すと見事に受身の姿勢をとる。そして僕の顔面に背中から着地。華麗に僕へ直撃したサンタは、僕の首をあまり一般的ではない方向へと曲げた。驚きと激痛に、一瞬息が出来なかつた。

「ぐはつ、ふはうあのっすみません、少しどいてくれませんか」

体育でやる馬とびのような姿勢の僕は、とにかく息苦しかったので声をかけて首をまわした。すると、バランスを崩したのかサンタクロースの少女は僕の背中からずり落ちて、くるりと丸まると僕の足元へ落下はじめた。「ごちやごちやと鋭利なものが無造作に置かれているベランダ。このまま落ちたら間違いなく死んでしまう！」 そう思い、僕は咄嗟にその辺の障害物を退けて少女が無事に降りられる場所をつくつた。けれど……

「ええええ！ ねえ君は天邪鬼か何かですか？」

少女は、丸めていた背中をピンと伸ばし、鉢植えに頭を向ける体勢になつてそのまま……。

「そこにはまだ、まだ鉢植えがああつ！ 待つて待つて待つて

とりや

「きやんっ！」

慌てて僕は手を伸ばし、少女を支えようとしたけれど……結果は無残だった。サンタクロースの少女はその小さな頭で……鉢植えを叩き割つた。

マゴバキンッ

マゴバキン、なんて音聞いたことがないけれど、あえて擬音で表すならこんな感じだ。

(注意 状況の説明がすごく長くなつたけど、これは全て数秒間の

出来事です（

じわり、と少女の頭から血が出るはず……僕はそつと口を開じた。できることなら氣絶したい、と思つた。しかしどうやら僕の神経はそこまでか弱くなかったらしく、しばらぐの後ゆりへりと口を開けた。

が、またすぐに閉じた。

視界に入ってきたのは、ほとんど怪我もなく僕の顔をまじまじと見詰めるさつきの少女。

その子は、赤と白を基調とした百円均一で（少し高めに）売つていいそうな、半そでのサンタ服を着て、観葉植物と土と破片が付着した白いぽんぽん付きのとんがり帽子を右手で押さえている。（真っ白な頬にかすり傷があつたが、それは絶対自業自得）その帽子から零れ落ちる、鳶色でセミロングの髪の毛は、可愛らしく一つ結びにしてあつた。

じつと互いを見詰めたまま、無言で時を流す一人。

「へくしゅつ！」

沈黙を破り、少女がくしゃみをする。

当たり前だよ、ま・ふ・ゆ！

大体そんな服装で日本の十一月の空を飛んだら、絶対に風邪を引く。こいつはニュージーランドから来たのかよツー……あ……ニュージーランド、か。少し前に地理で習つたところだ。日本と季節が反対の小さな国で、確かに羊がたくさんいたはず。真夏のクリスマスがつて……なら真冬の海水浴とかあるのかな？ いつか訊いてみよう。じゃなくて。

悪夢のような出来事に、つい現実逃避をしてしまった。

そして僕は今、非現実の世界へと独走中。

これは人生初の経験であり、できれば一生したくない種類の経験だった。

「つてええええ！」

僕が考え込んでいる間に少女は「寒い寒い」とかなんとか咳きながら、僕の秘密世界でもあるマイ・ルームへと入り、あひりとか鍵を閉めようとしていた。

もちろん、笑顔で。

「待ちやがれこの野郎おおおおおー！」

慌ててガラスにへばり付き、渾身の力でそれを阻止。間一髪のところで閉め出しを免れた。

……やたらと冷たい室内。

それもそのはず、ここには暖房器具が一切ないのだ。（こんど親に抗議しよう）

さておき、いきなりやつてきた落丁少女……どうしたらいいんだろう。て言つかなんでよりにもよつて僕の家に来たんだ？ とりあえず話し合おう。相互理解には会話が重要だ。

「き、君は一体なんなの？」

緊張して声が裏返る。

謎の少女は極めて明るく、けれど聞くほうを暗くさせる返事をくれた。

「ボク？ 見習いサンタのクロスだよ？ サンタの国から降りてきましたっ！」

「サンタ…………！？ 現実にいたんだそんなの…………だったらほら、サンタクロースがこんなところにいたら駄目だからお家に帰ろう？ ね、ね」

帰れーと視線で圧力をかけながら僕は言った。帰つてほしいという淡い願いも込めて。

しかし。

「えー、無理だよ…………まあ落ちちゃったのはお互の責任だし、つこさつき『降りてきた』って言つたの誰でしたっけ？ しかもこいつ、さりげなく僕に罪を擦りつけていません？

どうやらたった今、コイツとの間に話し合いでは解決できない（か

なり重要な）問題ができてしまったようです。

久しぶりに女子へ殺意に近い感情を抱いた僕は、けれど極めて控えめに、

「どうして僕まで悪くなるんですか！」

擦りつけられた罪を押し返した。

「だって君があまりにも物欲しげな顔でベランダに立っていたから、てっきり君が……」

そう言って、真っ赤に頬を染めるサンタ。今の発言のビートに照れる要素があるんだよつ、と突っ込みたかったが必死に堪える。なぜか？

こいつには何を言つても通じないから。

かくして僕の素晴らしい平凡は簡単に奪われてしまったのであった。同時に、新たな悲劇まみれの日常が始まった。

その2つ！ 落下物とカレー

翌朝。

真冬だというのに元気よく空を飛びまわる雀。そのやたらとでかい鳴き声によつて僕は夢の世界から引っ張り出された。陽光はカーテンによつて遮断されているため、室内はシンと薄暗い。さらに、かなり寒い。

今日はクリスマス。いつもならとくに向をするわけでもなく普通に過ごしているこの行事も、サンタの少女がいるおかげで、気分は不思議とクリスマスに。

「ふああ、んぐー」

布団を押し上げて伸びをすると、刺すような冷たさが全身を駆けた。同時に鳥肌が立つ。あまりの寒さにふるふると身震いすると、僕はまた布団へ潜り込んだ。

今日が冬休みだということにこの上ない感謝を。

両手を合わせ、足を水泳のばた足のごとく動かすという僕流『感謝の舞』をし、まあ再び眠りにつこうとしたその直後。僕の布団が物凄い勢いで剥がされた。

つつつーと入り込む真冬の空氣。

「おはようー！ おはようー！ 起きてーほりつー！」

と騒ぐサンタの少女。僕はそれを押しのけようと……クロスの服装に唖然。

……そして絶叫。

「うわあああああ！」

「きやあああああ！」

サンタの少女も便乗し、クリスマスの朝、僕らの変な合唱が冷たい空気を震わせた。

「つてなんでクロスも叫んでるんだよー！」

「え？ 朝のあいさつだよ？」

「え？ あれが挨拶なの？」

うん、と元気よく首を縦に振るクロス。サンタの国では朝っぱらから叫びあうそうです。

「ここは人間の国なんだから朝は静かに挨拶しようね。それと、つて人の話、聞いてる？」

僕の声を華麗なまでにさらりと無視して、クロスはどこか切ない表情になつた。そして自分のやたらと細い腹部をちょっとタッチ。

「とりあえず、『ご飯作って』

鳶色の髪を揺らし、かわいく命令した。

「わかつたから、とりあえず服を着て」

僕は苦笑して着衣を命令した。ちなみに今、クロスは下着に毛布といつとても奇妙かつ…………まあいろいろな服装。このままだと、このままだと！

（大量の小さな僕たち「ウウ…………！」）

（僕「落ち着け、まずは落ち着いて。災害のときは落ち着くのが一番だ！」）

「ねえ、なんでで服を着てないの？」

「暑かつたもんで」

怖いくらいにつこりと、サンタの少女は言った。若干の沈黙、そして

「そうだ！ ぼく、今日からここに暮らすね」

「ふーん。つて……え？ 何だつて？」

「そうだ！ ぼく、今日からここに暮らすね」

「…………え？ 何だつて？」

「ぼく、今日からここに暮らすね」

涙が一筋、頬を伝つ。

「ああ、まさかこの歳で生きてることを悔やむ羽目になるなんて」「なに言つてるの！ 生きてるから人生楽しいんだよー！」

「黙れ、僕の後悔の元凶」

今日は聖なる日……これじゃまるでクリスマスプレゼントだ。朝起きたら変なのがいて、いきなり居候宣言をするという世界最悪のプレゼント。ねえ神様、僕の行いはそんなに悪かったんですか？ だったら普通に石炭くださいよ。石炭の方がよっぽど嬉しいんですけど……

ねえ神様！

悲痛な叫びは、冷たい空氣へと消えてしまつ。

幸い、僕の家に大人は一人もいない。あと一日間だけいないので、その間にこいつをなんとかする必要がある。旅行好きの両親は、なぜか息子を置いていき、四泊五日の旅へ。そのため、今は僕がこの家を守っているということになっている…………のだが。ごめんね家族よ！ 僕は城を守りきれずに、あっけなく侵入を許してしまった頼りない兵士です！ 帰つてきたら、ぜひこの侵入者に驚いてください！ しかも今日から居候としてこの家にとり憑くって言いだしてます！

とりあえず、腹がへつては戦も出来ないので文句と涙は飲み込んでキッチンへと向かつた。

朝食は簡単にトースト・オン・バターと牛乳で済ませる。侵入者が朝食のメニューを眺め見ながら、非常になにか言いたそうにしてたけどそんなこと気にしない。もちろん、ご意見ご感想も一切受け付けはいたしません。

昼食も夕食も、トースト・オ（以下略）にしようと思つたけれど、それではさすがに僕の体が持たないので……

「ねえクロスー、昼ごはんは何が食べたい？」

一応居候の意見も参考にしよう。

「ミミズとローネー！」

サンタの少女は、意味不明かつ理解不能単語を発射。それは見事に僕の頭脳へクリティカルヒット、僕は激しく混乱した。

「なにそれっ？ 」この世にないよそんな料理は。つてか誰だよローネって！」

「呼び捨てちゃダメ！ ローネちゃんは英雄なんだから。サンタの国に伝わる童話なんだけどね……ローネちゃんは、あのすごく有名な裂いて食べるチーズを極限まで裂いつとして神経衰弱に陥った少女なの」

「悲しいよ、その子！」

クロスも僕もそのおバカな少女に黙祷を捧げる。どうか、安らかに……じゃなくて。

「ねえクロス、結局君はなにが食べたいの？」

「ミミズとローネ」

「だからなにそれ！ 聞いたことないよそんな料理」「でも現実あるんだよ？」

「でもサンタの国の食べ物は人間の国にはないんだよ。だからね、ほらこの本とか見てさ」

レシピブックを渡し、必死に説得しようとしても、サンタの少女は「あるある一絶対あるんだからー」と言つて聞く耳を持つてくれない。

「サンタの国にいる時、お母さんがミミズとローネを作ってくれたもん！」

「あのは、こっちの世界ではミミズなんて食べないのー！」

「え？ それにはミミズなんて入つてなかつたよ？」

「はい？ ジャあなんでミミズとローネなの」

「うーん知らない。でも大豆とトマトが入つてたよ？」

「それってさ、あれだよね」

討論すること約三十分……ようやく結論が出た。サンタの少女は、

『ミネストローネ』が食べたかったらしい。間違え方が幼稚園児レベルだ。失笑とともに訪れた気まずい沈黙。

「よし、じゃあミネストローネの材料を買ひに行こつか！　さうす
る、一緒に行く？」

あまりの気まずさに、とつあえず話題を切り出してみる。

「えー！　みねすとろおねの氣分じゃなくなつちやつたよ、もう。
今度は「うらめし屋で、きもだ飯が食べたい！」

おいコロコのクソサンタ……

「あああ！　また意味が解らない」とを言ひ、「じゃあ今日せコン
ビニ弁当ねつ！」

やだやだーと駄々をこねるサンタの少女を引きずり、僕は玄関を出
た。

そして今。

僕はひたすら店員さんたちに謝つてゐる。なぜかつて？

始めから説明しよう。

僕とクロスは徒歩で最寄りのコンビニへ行つた。しかし自動ドアに
驚いて店内に入れないアホサンタ。これはこいつのものなんだと説
明したが、理解を得られず挫折。結局行き先を変更して、隣のスー
パーへ行くことにした。そこまで来てクロスは引き戸を押し開けて
破壊。防犯カメラもついでに壊させて、僕とクロスは疾走した。け
れど見つかって、謝つてゐるというわけだ。

「本当にじめんなさい、ほらクロスも謝るのー」

「やだー」

「やだじゃないのー、壊したのはクロスなんだから」

「だつてぼく、これくらい直せるもん」

「…………」

ん？　今、なんて？　僕の記憶が正しければ、サンタの少女は直せ
ると言つたはず。

「じゃあクロス……直してくれる？」

「きもだ飯、作ってくれる？」

「…………」

条件付きらしい。後できもだ飯とは一体なんのかを聞いておこなう。「いいよ、よくわからないけど頑張つて作る！ 作るから直して！」僕の頼みにクロスは大きく頷いた。（まるで幼稚園児）そして、さつと首をあげるとかわいらしくターン、ぴょいぴょいと空中でステップを踏み、片手を腰にあてた。最後に、せりふと揺れる鳶色のツインテールをふあさつと空中で旋回させ……

「さけてとろけてかるしうむ」

謎の呪文とともに、割れたガラスたちは一斉に集結、元の形へ戻る。そしてきらきらと輝きながら鉄製の枠にピタリと収まった。はい、完成。

「ほり出来た。これできもだ飯……あーどうしよ？ また気分が変わりそう！」

「……………ぼ、僕は…………」

非現実的すぎる光景に言葉を奪われたが、慌てて取り戻す。

「僕は今、初めてクロスがサンタに見えたよ…………」

「いやだなあ！ ぼくはいつでもサンタだよ？ そんなことより、大変だよ！ 今この大変さを例えるなら、ローネちゃんの映画が絶望後悔中つて表示と共にCMになっちゃうくらいだから、ビーグルつてよりカレーを食べなきや！」

いきなり何を言い出すかと思つたら、メニューの変更だった。

「絶賛公開中じゃないのかな、それは。お昼はカレーね。もう変えたらだめだからね！」

笑顔で念を押し、僕はクロスの手を引いて本格的に買い物を始める。先ほどの魔法みたいな光景の余韻が残る入り口、それとあっけに取られたままの買い物客。背中に店員さんたちの奇妙な視線を感じたけど、そこは敢えて無視。気にしないの術で通そう。

青果コーナーに並ぶ色とりどりの野菜を見て、興奮気味のクロス。目が少女漫画の「じとくキラキラと輝き、「かるしうむ」を感極まつ

たように連呼。お密せんの目を引き、僕だけが羞恥で真っ赤に染まつた。

「あれえ？ 斗助、顔がトマトみたいだよ？」

さりげなく失礼なことを言つクロス。

「つてクロス、なんで僕の名前を知つてるの？ 名乗つた覚えなんてないよ、僕！」

「制服の……名札に書いてあって、それで……」

急に暗い表情になつて、クロスは言葉を紡ぐ。

「いつ見たのツ？ へ？ あ、いや、そんなに気にしなくていいよ？ ていうかむしろ気にしないで？ 僕は別に名前で呼ばれても嫌じゃないし、ね？」

必死で言葉をかけたのに、サンタの少女は僕の前からいなくなつていた。

これじゃあ僕、独り言じやん。

そんなことを考えていたら、クロスが買い物カゴへ大量に野菜を放り込んできた。赤、白、黄色ってチューーリップですかこれは？

「なにやつてるのさ！ カレーを作るんでしょ？」

カゴを埋め尽くす、レタス・キャベツ・メロン・イチゴ・キュウリ……そのいろいろな青果たち。その非常識度は絶句級。なんだかステンドグラスみたいだ。冬にキュウリがあるとは、世の中も進歩したんだなあ。

ぼーっとカゴを見詰める僕。その後頭部を思いつきり引っ叩き、クロスが叫んだ。

「カレーには、あとサクランボが必要だね！ ねー斗助」

満面の笑みで、後頭部をする僕に同意を求める。

「いらないよそんなもの！ 大体カレーには入れない野菜ばっかり持ってきて、にんじんとかじゃがいもとかそういう基本的なものが一つも無いじゃん！」

「んもう… 基本とか常識とかにとらわれちゃ、ダメー！」

「なんでそーなるの？ 大切だよ常識は！」

叫ぶ僕を置き去りにして、クロスは果物の棚へと激走。サクランボを持つてきて、カゴに投入した。

もうあきらめよ!。それが一番。そしてカレーが完成したらクロスに全部食べさせよう。

どんどん重さを増していく薄灰色のカゴに、いい加減泣きたくなつてきた。

「ほらクロス、カレールウを買わなくちゃただのスープになっちゃうからさ、そろそろ野菜はやめてくれる? このままじゃ一週間分の野菜が摂れちゃうよ?」

「チーズ」

「は?」

「……チーズがないカレーなんて、麺がないラーメンと一緒に! そ
うとなつたら善は急ぐ! まずはかるしうむを!」

麺がないラーメンつて……例え方が必要以上に大袈裟だ。ご飯がないカレーの方が的確な例え方だと思う。
それと、『善は急げ』の使い方が間違っている気がするんだけど、
それは気のせい?

場面は変わつて乳製品売り場。

「決めた。ぼくは裂いて食べる棒状チーズを極限まで裂くよ!」

「待つて待つてよクロス! それってローネちゃんがずっと前に挑
戦して神経衰弱に陥っちゃつたあれでしょ? やめなよそんな危険な
遊びは!」

絶対やつちやだめだよ、と言おつとした僕の口は牛乳パックを押し
込まれて塞がれた。

「へえうおふ! ほえふおはふひいへ! ふいきゅいかへきはいに
よ!」(ねえクロス! これをはずして! 息が出来ないよ!)

注意 両手は買い物カゴと野菜で塞がつてゐるため、自分では取れないのです

「もーもー」と呻くことしかできない僕の前に、サンタの少女はびしげっとカツカツよく親指を立てた。

「遊びじゃない！ 裂いて食べる棒状チーズを極限まで裂くつていうのは、円周率を何億桁も暗記するのと同じくらい大変で、フェルマーの最終定理以上に難しいんだよ！」

クロスの説明では解らなかつた人のために、僕が解りやすくまとめよ。

つまり、ギネス記録より大変でノーベル賞より難しい、といつことなんだと思います。確かにありませんが。

「そんなことよつた、時計見れば分かると思うんだけど、もう一時なんだよね。つまりおやつに近いの」

こんなバカなやりとりをしているうちに、三時間も経過していたらしい。なんだろう、この苦しい今までの空しさは……

「それが？」

「とくに意味はないけど……あ、そうだ。カレー、早く作ろう？」

「うんっ！ ジャあ早く帰ろっかあ！」

そう言って、元気よくレジへ向かうサンタの少女。僕は慌ててその後ろ姿を追いかける。

常に僕の数メートル前を進むクロス。その歩調に合わせて、さらりと揺れるツインテールと、寒そうな半そでのサンタ服。おかしな少女は、けれど周りの視線は気にならない様子。まったく、のんきなもんです。

結局、超奇妙カレーは材料費だけで軽く五千円を越え、僕のお財布はかなり軽くなつた。そして足取り重く、荷物も重い帰り道。

「かるしうむ それは近いみらいの希望 るらひ みるく。
ちーす・ようぐると 摂り過ぎると 体にものすごい悪影響がで
るよ 頭文字を集めればーみちよ さいととかしてかかるしう
むつ 」

クロスが突然意味不明極まりない歌を歌い始めた。乳製品のイメージアップとイメージダウンを同時に歌詞にもりこんだ童謡チックな

曲。

「何、そのものす”い勢いで変な歌はツ！？」

「サンタの国でもつともポピュラーなソウルフルな童謡だよ？」

「そんな奇妙で不可解な歌をサンタの国の子供達は歌つてゐるの？ ソウルフルのくせに、あんまり感情こもつてない気がする」

「そりやつて斗助はいつも…………五年前と何ら変わつてない」

「待て。五年前はまだ世界は平和だつたし、クロスと運悪く出会つちやつたのは昨日のことだよ！ 勝手に変な過去を作るなああッ！」

「早く帰ろつ？」

思わず立ち止まつてしまつた僕を（ものすごい力で）小突くと、サンタの少女は走り出した。野菜とチーズが大量に詰め込まれた買い物袋は僕が持つてゐる。ちなみにこれ、引きずりたいくらい重い。あまりの重量に体中の間接が悲鳴を上げた。ふらふらと足元が覚束無くなつてきた。眩暈がする。吐き気も筋肉痛も腹痛もする。

「待つてクロス……ちょっと止まつてよ…………これすごく重いんですけど……」

「息が荒いよ？ もう疲れるなんて、これだから最近の若者は……」

「そんなこと言つてないで早く持つてよ！」

腕は引き千切れる寸前までいき、肺は仮停止状態に。僕はあまりの苦しさにその場にパタリと倒れた。

もう、限界。

そして怒りは抑制不可能範囲へ到達、急速に感情を沸騰させる。

アホサンタのクロスは「寝てないで早く行くよー」と激しく能天氣いい加減こつちも苛立ちを抑えきれない。息を整え、叫ぶ。

「クロス！ いい加減にしてよ！ 人ん家に勝手に上がりこんきて居候宣言するし、出かけてもドアぶち壊したりして僕に迷惑ばかり掛けるし、さらにその帰り道でも君は荷物も持たないで前を楽しげにあるくだけッ！ この……この役立たず！」

「…………え」

クロスから困惑した雰囲気が零れ落ちる。でも、そんなこと気にしているられないくらい、僕は苛立っている、この侵入者に。人の日常を奪つてそしてさらに入をこき使つて……こんな役立たずなサンタじゃ、絶対エターナル見習いだ。そうだ、こんなサンタ……なんて。「一度と僕の近くに来ないで……居候なんて絶対いらない。不需要なんだよ、我が家には」別れを告げて、僕は帰路を歩む。買い物袋も居候も全部置いたまま。最初から、全部なかつたみたいに置き去りにして。

風は一陣。

聖なる日『クリスマス』。もうサンタの少女とは関わらないようにしてしまう。勝手に落ちてくるほうが悪いんだから。僕はぐるりと踵を返し、走り出す。猫を捨てるような罪悪感が、後ろ髪を引っ張つたけれど、ひたすら前へ進む。

冬の商店街はそろそろ薄暗くなつてきて。
遠くには一番星が浮かんにはじめた。

夕焼けが冬の空を覆う。

イルミネーションは、やつぱり電球切れで。

時間的に活気が出てきた商店街を一人走つた。

不意に思い出されるのは、あのサンタとの出会いと会話。いきなり降ってきた赤い物体。そして居候宣言や珍料理名、ローネちゃんとチーズの話……

「うわあっ！」

前に進んでいるのに、前を見ていなかつた僕にトラックが迫る。
避けなきや、でも動けない……轢かれる……っ！　死か大怪我のどちらかを覚悟した刹那、

「さけてとろひけてかるしつむ」

あの謎の呪文が聞こえた気がした。

でも、それは絶対に氣のせい。だつてあのサンタは役立たずの居候で、人のことは考へない自己中心的な見習いサンタだから。

「あ、れ？」

……いつまでも経つても痛みは襲つてこなかつた。恐る恐る田を開ける。

そこには、ひしゃげて潰れたトラックと、満面の笑みで買い物袋を提げてゐるクロスが立つてゐた。そいつは、

「ちゃんと前見て歩かなきや。それよりほくほくお腹空いてやつた。早く帰つてカレー作りついで」

笑顔のまま、言つ。

「クロス……怒つてない、の？」

僕の問いに、サンタの少女はきょとんとして首を傾げた。

「だつて怒る理由がないもん。斗助は……もつ怒つてない？」

「いや、もう

「うう……あ、あのね……そうだ！ ばくこれからちやんとお手伝いするよ？ 迷惑掛けないようにながんばるよ～。だから、一緒にいよ！」

「うん、別に構わないよ。僕は

「じゃあ善は急げ！ 家まで競走しよー！」

キンコーンカーンコーンと、どこにでもあるチャイムが商店街に響いた。それを聞いて、サンタの少女がまた、はしゃぎだす。

「金婚冠婚だつて！ おもしろいねー」

「ええっ、キンコーンカーンコーンだよ！ なんで漢字にしちゃうの、それを！」

野次馬が募る商店街を一緒に歩く。視線がかなり痛くて、クロスと僕は全力疾走した。やつぱり僕の前にいるクロス。それはそれで、いいかもしれない。

夕焼けはあつと/or間に夜へと変わつてこき、家に着いた頃には星空となつていた。

「まだ五時とちょっとなのになー」

クロスが買い物袋を振り回しながら空を見上げる。そうだね、と答えようとした僕のお腹が、ぎゅるるーとお行儀の悪い鳴き声をあげ、僕らは笑った。笑いながら玄関をくぐった。

運がよければ、親が許せば、サンタが今日から居候。

「夕飯のカレーはぼくが作るよ

「え……？ 今、なんて？」

「夕飯のカレーはぼくが作るよ

「ちょっと不安だけどまかせるよ……」

「やつたあ！ 完成したら呼びに行くから、斗助は一階にいてちょっと、というよりかなり不安だけど、とりあえず一階で待つことに。

待ち続けること三十分。ようやく完成した模様。

「ところで、これ一体何？」

僕はキッチンテーブルに置かれたカレーを見て呟いた。ものすごく不気味な緑色をしているカレーからは、悪臭が漂っている。あきらかにこれはカレーじゃない！

「……ねえクロス、これってカレーだよね？」

「当たり前じやん」

「何でこんな色してるの？」

「色々工夫したからね」

「うん、その工夫の結果カレーに殺傷能力が備わっちゃったね」

「まあ食べてみなよ」

クロスは自分だけチーズを頬張りながら、僕に殺人カレーを勧めてくる。

「食べるよ……食べればいいんでしょ、食べれば」

空腹で半ばやけになり、スプーンをご飯に差し込む。さく……ぐちや、と食欲を削ぐ（カタツムリをつぶした時の）音がした。次いで、

鼻を突く（雀の死体を土に埋めて、一ヶ月後見に行つた時の）悪臭。全身に鳥肌が立つのを感じながら、ゆっくりと銀色のスプーンに乗る緑色のカレーを見詰め直した。

「ていやーっ」

「なにッ？…………」

クロスが大声を上げながら僕の口へカレーを押し込む。口内に広がる地獄の味。

大泣きしてもいいでしょうか？

「むぐおう！ ていやーじゃねえよこの野郎！ ……『ごくん。

つて、ぐえへぎお！ 飲んじゃつた、飲んじゃつたよ！ ねえ、と

ころであれには何が入つていたの？ 地獄の味だつたんだけど！」

「大丈夫？ ちなみにねー材料は、キヤベツとレタスとサクランボとキュウリとメロンとイチゴとレモンと砂糖と黄粉と塩と醤油とチーズとヨーグルトと牛乳と芥子とうびん粉とたらの切り身と抹茶とカタツムリと雀が入つてたんだよ！ あと、シチューのルウ……」「今さ、食品以外の単語が入つていた気がするんですけど。しかもシチューのルウ使つたら、カレーじゃなくなるだろ、おい！」

空腹は、一番の調味料。らしいのですが、さすがにこれは食べられません。

と、いうわけで緑色の物体はこの後丁寧に処分させていただきました。無駄になつてしまつた野菜と果物とその他の食品たち（あとカタツムリと雀）に、黙祷を。

今後こいつには何も作らせないようにします。

苦行のような食事を終えた僕たち。何もかもが初体験のサンタクロースは、人間の部屋に大はしゃぎ。僕の身体と精神を全力でつづいた。

（食事の後、あの棒状チーズを、手をブルブルとさせながら裂き始めたクロスを全力で止め逆切れされて、蹴られ殴られ首を絞められ

た。そしてチーズを諦めたクロスに『一緒にしりもちをしよう!』と頼まれてそれを拒否。するとまたしてもクロスが逆切れして、額にしつこく垂らされた。さらにクロスが『勉強机の上に寝たい』と言い出したので厚手のビニールに毛布を敷いてあげた。ついでに漫画を布で包んだまくらも。それなのに、サンタの少女はいつの間にかクロゼットへ侵入。しばらくそこをがさがさと搔き回して衣服を散らかし、結局は勉強机の上で寝た)

そして、ようやく静かになつた部屋。

日本の栃木県では、あと数分でクリスマスが終わります。

現在時刻は午後十一時五十分と少し。

僕の勉強机には、ぐつすりと眠るサンタの少女がいる。

久しぶりのクリスマス。

彼女はプレゼントを配達する、という子供たちの夢を守る仕事中に僕の家に落っこってきた、見習いサンタクロースだ。

サンタが居候している家なんて、ここくらいだらうな……と、ちょっとした優越感（を騙つた劣等感）が心に押し寄せた。

「まったく、商店街で迷惑かけないようにする、とか言ってたくせに。ほんと、勝手でわがままなんだから。……おやすみ」
ずれていた毛布を掛け直してあげて、僕も眠りについた。

明日で、両親が帰つてくる。

そんなことも、忘れて。

その3つー 落下物と家族会議

次の日、僕らは家族会議を開いた。議題は、このサンタクロースをどうするか、である。

卓袱台を囲んで、お茶なんかを啜りながらの会議は、ゆるゆるしきしていく緊張の欠片もなかつた。そのせいか、足を崩し始めるサンタクロース。

「初めまして！見習いサンタの、タサン・クロスです！クロスって呼んでください。好きな食べ物は乳製品で、嫌いな食べ物は豆製品です。身長は百五十センチで、上からハ六、六一、ハ三。得意なことは料理で、苦手なことは長時間集中することです。今日から居候させてください！」

やたらと長い自己紹介が終わり、クロスはにへつと微笑んだ。「いいじゃないか別に。それと美人だし」

この能天気な声は、今年で四十一になるお父さんのもの。

「ええ。明るくなるし、全然構わないわよ？」

そしてこの凛とした声は、今年で三十七になるお母さんのもの。

「許してもらえるのは嬉しいけど、もう少し驚いつけよ？サンタクロースだよ？居候だよ？」

「でも、よかつたね。斗助」

「うん……よかつたね、クロス」

今日から我が家にはサンタクロース（見習い）が居候。

早速くつろぎ始めたクロスは、たたみの上で寝転がつたり、勝手にまんがを持ち出してキッチンテーブルに積み上げていつたりと、やりたい放題やつている。

「少しは片付けとかやってよねー」

「いやー」

「まったく……クロスの役立たずー」

ずっと前から一緒にいたような感覚。よくはわからないけど、とつ

ても不思議な感じ。

「あ、三時だ！ めやつめやつ」

立ち上がり、食器棚を物色し始めるクロス。戸を開けてスナック菓子を見つけるや、超高速でそれを数袋抱え込む。どんな力で抱えているのか、袋からぱりぱりと中身が割れていく音がした。

「一緒に食べる？」

「うん、ありがとう」

「ごつごつ」なに碎かれたスナック菓子。けれど、それはそれでおいしかった。

「喉かわいた。飲み物もつてきて」

「それくらい自分でやんなよ」

「持つてきて」

「自分でやんなって……ねえなにそのピンク色のどびなわは？ え、ちょっととなんで大上段に構えてるの？ 何する氣ッ？ わかつた、持つてくるからそれを下ろして」

「やつたあ！」

渋々椅子を引き、お菓子を数個片手に掴んでからキッチンへ行く。冷蔵庫からクロスが大好きないちいじ牛乳を出し、キャラクターもののマグカップへ注ぐ。

「おーそーいー！ 喉乾いた！」

文句を言つサンタの少女。まったくもつてこここつは役立たずだ。

「今持つてくからちょっと待つてて」

「えー、こちいじ牛乳うー？ 今日は普通の牛乳がよかつたのにー」

「だったら自分でやればいいじゃん……もつ」

その4つ！ 落下物と別れ

「んー斗助え！ 今日は散歩に行きたいー！」

「こんな寒いのに？」

「うん。行こうよー、散歩散歩散歩散歩おお

というわけで、僕とクロスはマカティニアモンド商店街に行くことにした。

イルミネーションが全て取り外された商店街はどこか殺風景で、より寒く感じられた。けれどクロスはとつても元気。早速、文房具店を見つけそこに入っていた。

「うつわー！ ここすつゞーー！ ねえなんでこんなにキラキラしたもののがたくさんなの？」

辺りを見回して目を輝かせるクロス。

「それは多分お店だからじゃないのかな？ そうだ、なにか欲しい物ある？」

「お店！」

即答。相変わらず変な思考だ。

「無理だよクロス、そういう欲しい物じやなくて、もつと小さな欲しい物だよー！」

「無理じゃないよ！ だつてぼく、サンタクロースだもん！ 見習いだけど」

そう言つと、クロスは空中でとんとんとステップを踏み始めた。そして、華麗にジャンプ。着地より少し遅れて、巻き上がりついたスカートが元に戻つた。人差し指を回しだす。つてなにする気だ、あとのサンタ！？

「さけてとろけてかるじつむ」

白い閃光が店主を直撃。あつという間にセロハンテープへ変身した。

ことなん、と鈍い音を立てて床に落ちるセロハンテープ。白い床を転がり、柱に当たって停止した。

「ほら

一瞬の沈黙。

「ほらじやねHエゑつ！…………」いつなつたら、逃

げるよクロスツ

バカサンタの手首を掴むと、僕は一目散に文房具店から逃げ出した。もう一度どこいつとは買い物に行かない！ 絶対に行かない！

「まったく、クロスはすぐに魔法を使うんだから！ いい、復唱して？ この世界にいる限り魔法は絶対に禁止！」

「この世界がある限り時間は流れる！」

「なくとも時間は流れますツ！ とにかく、魔法は使わないこと！ なにがあつてもダメ！ ゼツタイ！」

「しかたないなあ……斗助がそう言つなら善処するよ。絶対に使わないよ、魔法は」

真剣な顔で、グッと親指を立てるクロス。ものすごい勢いで信用できぬ。

しばらくぶらぶらと歩いていたら、文房具店から凄まじい悲鳴が聞こえた。野次馬たちの声からすると、どうやらセロハンテープが勝手に歩いて喋るらしい。

犯人はとくに気にしていない様子。

「あの『質問の多い料理店』って何？」

「レストランだよ。そうだ、今日は商店街を散策しようか？」

「贊成つ！」

ハイテンションなサンタクロースを引き連れて、とりあえず本屋からまわることにした。まだ人の少ない商店街。

かわいらしいポップな文字で『本屋さんだよん』と書かれた看板を見つけ、早足になる僕。自分(で)動(かしてお開けください)と張り紙されたガラスの引き戸を開ければ、本屋特有の甘い香りが暖房と混ざっている空間が。

クロスはそこに並べられた大量の本を見て、さうに興奮。感極まつたといふように、僕の名前を連呼した。

「斗助、斗助、斗助、斗助これ、これ欲しい！」

ばひゅっと空気を切り裂いて僕の目の前に差し出されたのは『それゆけ！ サラリーマン』。絶対的大人気児童書……。

「君は何歳だつたけ？」

「十四歳」

「今、君が持つてるのは何歳の子向けの本かな？」

「五歳だよ？ でも大丈夫。読めるもん」

対象年齢はあまり気にしない様子の十四歳。ちなみに、『それゆけ！ サラリーマン』とは、社会の平和を守りたいと願う、アンパンのよう不太つていて、つるつぱげの中年サラリーマン山田の妄想日記である。小さなお友達に大人気の絵本で、アニメ化したほどだ。

(ばか子) サラリーマン！ 新しい取り引きよ！

(サラリーマン) 元気百倍サラリーマン！ 残業パーンチ！

(社長) うわああああ

(リストラされそつだつた社員) ありがと、僕らのサラリーマン！

(サラリーマン) ふははははははは。では、さらば
びゅーん、サラリーマンは飛んでしまった

(本物の社長) いら、山田くん！ しつかり仕事をしないかね！

(サラリーマンこと田中) う、うめんなさい社長！ お願いですか
ら見捨てないでください！

「おもしろい、これすんぐおもしろいよ！ 買つて買つて…」

「まったく、もう少しまともなもの読んだらどうな。例えば……」

「男の子と女の子 図解 よくわかる体のひみつ、とか？」

にっこりと、分厚い本を突きつけてくるクロス。

「やめて、サラリーマン買うからそれをもとの棚に戻して。じゃな

いと変態だと思われる

……そんなこんなで（便利な言葉です）よつやく本屋を出た僕とクロス。嬉しそうに、それゆけ！ サラリーマンを読みふけるクロスは、歩いている間一言も話さなかつた。

「そうだ、クロス」

「ん？」

ようやく、ふいっと本から顔をあげるクロス。ぽんぽんつきの帽子もその動きと一緒に上を向く。

「これ、さっきの本屋で買ったんだけどね、クロスいつも同じ色の服でしょ？だからさ、青いミサンガ。これつけてみて？」そつと、紙袋に包まれた紐を渡す。クロスは、うわあと喜んでそれを受け取つた。わしゃわしゃと紙が千切られる音。

「ね、ここ結んで？」

細くて真っ白い腕に、水色のミサンガが絡んでいる。でも、それは両端が繋がつていなくて。

「これをつけている間は、不思議な力を使っちゃダメって約束ね？」

「はい、これでよし。きつくなない？」

「ちようどいいよ！ ありがと」

腕を虚空へ伸ばし、左右に振つてみせるクロス。赤いサンタ服に水色のミサンガ、と似合わなすぎる色あわせだったけど、それでもそれは綺麗だった。真っ白な腕に結ばれた水色の紐……それは、クロスがこの世界にいる証。

「クロス、今日は家に帰ろうか……ね」

「うんッ！」

「……お待ちなさい、ジャステイリア・タサン・クロス。サンタの国より迎えに参りました。さあサンタの国へ帰りましょう

突然、後ろから掛かる不気味なほど澄みきつた声。

振り向けばそこには、長身瘦躯で暗銀色の長い髪を垂らす美人な女性がいた。その人は、人差し指と親指で赤い輪ゴムをつまんでいる。

やはりサンタ服なその女性は、ジャステイリア・タサン・クロスによく似ていた。

「ごくりと息を飲み、身を硬くして僕の後ろに隠れるジャステイリア・タサン・クロス。

長い……やつぱりクロスのままでいいや。

「いや、帰らない！ だってぼくはここにいないといけなんだもん！」

迎えに来た？ ってことはクロスが帰る？ セツカ居候が許可されたのに？ 今更？

「誰……ですか？」

「申し遅れました。わたくし、サンタの国クリスマス総合会議の議長を務めます、ジャステイリア・タサン・リリスと申します」

「お姉ちゃん！ なんで、なんで來たの？」

「お姉ちゃんッ！？ 確かによく似てるけど、まさか本当に」

「迎えに、來たのです。それと……わたくしは議長です」

クロスの姉らしいリリスは、冷たい視線で僕を眇め見た。

その途端、ぱしゅっとリリスが持つていた輪ゴムが伸び、クロスを捕らえる。動きを封じられたクロスは、なにか叫びながら辺りに真っ赤な光を撒き散らし、右手に赤いとびなわを顕現させた。

「そんなものでわたくしに勝とうと？」

壮絶な姉妹喧嘩の火蓋が切つて落とされた。

「くつ……えいっ」「くつ……えいっ」

クロスは輪ゴムを引きちぎると軽やかに跳躍し、距離をとった。そして右手を空中で振れば、直線に伸びていくとびなわ。それを紙一重で避けたリリスは両手で輪ゴムを挟み、クロスの後ろにあるコンクリートの壁目掛けて投擲した。そして姿勢を低くして後退。直後、クロスの後ろにあつた壁が弾けとんだ。

「どうなつてゐの？ クロス！」

「斗助？ ぼく、サンタの力を使わないので約束したのに……ごめんね？ 先に帰つてて。ぼくも必ず帰るから……」

「クロス、あなたは帰させませんよ」

「また後でね斗助。えええいつ！」

声を上げ、とびなわを振り回しながら突進していくクロス。リリスは輪ゴムを指に絡め、シールドを作る。

「てやあっ」

しかしクロスは、とびなわをシールドに当てる寸前で引いた。打撃対象を失つたとびなわは威力を保つたまま、地面に転がっていたコンクリートに直撃。超重量の塊を高く舞い上げた。

刹那、轟音が空気を駆け、振動が地面を走った。

砂煙を撒き散らしながら碎け散るコンクリートの塊。辺りは一瞬にして、真っ白な世界へと変わった。その奥に揺れる、赤い色。見紛うはずがない。間違いなく、あれはクロスだ。

「クロス、一緒に帰ろう」

「ううん先に帰つてて。ぼくは必ず戻るよ？」

なにかを堪えたように細かく震えている、やつぱりものすつゝい勢いで信用できない声で、彼女は呟いた。

それはまるで、独り言。

切なくて、苦しくて、もう一度とクロスに会えないかも知れないと
いう思いが、さらに胸を締め付ける。

「必ず戻つてきてね……」

それしか、言えないから。

「うん、約束する」

これが最後の約束になるかもしれない。

姉の攻撃を、避けることも防ぐこともできなくなつたクロスは、諦念を表情に載せ、その場に座り込んだ。

「……先に帰るなんて、できないよ！　ずっと僕と一緒にいよう～」

「う、ん。しかたなく、善処、してあげる、ん……だから」

「ありがとう、クロス」

微笑して、ぐつたりとした四肢を地面に突き立てるクロス。そのまばたと跳躍し、虚空に立つと専用武器であるとびなわを顕現させた。

想うのは、存在のみ。

人間の世界は、想像するほど綺麗な場所じゃなかつたよ。
でもね、あなたがいてくれたんだ。

認めてくれる、優しい君がいたの……。
だから、ここで消えるわけにはいかない。

最後の力を使い、クロスはとびなわを振り上げた。もうリリスがどこにいるかなんて分からなかつたけれど、すべてをとびなわに委ねて、ひたすら振った。

虚空を切り、風を唸らせ、けれどリリスにそれは当たらない。力が尽きる直前

打撃の感触。

そして、リリスの悲鳴。

なにかが途切れたような、沈黙。

雨が降り始めた。

クロスの霞む視界に、血を流しながらも、しっかりと立っているリスが見えた。

「帰るんですけど……」

かすれてしまつた姉の声。クロスから、一切の力が抜け落ちた。
それ待つていたかのように、血でぬらりと光る輪ゴムがクロスと斗助を拘束する。

「大丈夫です、斗助さん。クロスやわたくしたちサンタに関わる記憶は全て消えますから。では、さようなら」「いやだ、と叫ぼうとするクロス。けれど喉が渇いてしまい、声が出ない。

涙が唇を濡らし、舌を潤す。

最後の言葉を紡ぐため。

「やだ、忘れられたくない！　忘れないで、忘れないで！

一緒によう！　だから忘れちゃいやー！」

絶対に

そして

その5つー 落下物と……

気がついたら僕は、自室で寝転んでいた。

必死に記憶を辿っても、思い出されることは何一つない。ただ、大切なにかが消えてしまつたという苦しみだけが残つていて。手には、ぼろぼろのピンク色をしたとびなわが一つ。

「なんだろ、これ？」

白い持ち手の部分に、かわいらしい文字で『クロス』と書かれていた。

クロス……どこかで聞いたような気がする。

「まあそんな単語はどこでも聞くし、別に普通か」夕焼けが窓から零れ落ち、部屋を優しく暖める。

「斗助ー タジ飯できたわよー」

ドアの向こうで響く声に、はーいと一言返事をすると、僕はとびなわを引き出しこしまつて部屋を出た。

それから僕は、普通の中学生として生活していく。

心になにか宿えるものを残したまま。

十一月の下旬、木曜日の朝。

「おはよう、斗助くん」

ツインテールの彼女は、今年一緒にクラスになつた女の子で、僕の隣の席に座つている。

そして、片思いの相手もある。

「あ、おはよう深黎ちゃん」

「早くしないと、ほら、斗助くん旦直でしょ？ だからさ

「うわ、忘れてた！ ありがと」

「まったくもー。ふふっ、仕方ないから私が手伝つてあげよつか？」

ウインクしながら微笑を見せる深黎ちゃんに僕の心臓は早鐘の「！」と
く高速で血液を送り出す。

「いいの？ 助かるよ」

「今日だけ、特別だよね？」

「うそ」

早く早くーと笑いながら、先を進む深黎ちゃん。ふつと心に幸せが
灯る。それはそう、彼女の笑い方が、とても大切なにかによく似
ていたから。

カバンを掴んだまま、花に水をあげる。行きたい高校なんかの他愛
もない会話を繰り返して、話題が途切れた頃。

「そう言えば、明後日ってクリスマス・イブじゃない

「ああ！ そうだね」

「もしよかつたら、一緒にどこか行かない？」

突然の誘い。びしきようか迷うふりをしながらけれどもう結論は出
ている。

一緒に行きたい。…………一緒に

「うん、それいいね！ じゃあ予定が空いてたら連絡するよ

「よろしくね。忘れないでよ？」

「もちろん、忘れないよ」

自分で言つた言葉が、ずきつと胸を刺した。なんでだらう… やつ

ぱり僕はなにかを忘れている？ 気のせいだよね。

胸に宿えるこの感覚も、全部全部氣のせいなんだよね……

今日はクリスマス・イブ。

深黎ちゃんの誘いを断つて、僕は一人家にいた。よくは解らないけど、どうしても家にいたかったから。

「家にいたいからいるって……なんだか開き直った引きこもりみたいだな……」

ベランダに出てみれば、聖夜前に相応しい澄み切った風に、透明な夜空が視界を埋める。そこに浮かぶ数多の星と、ひっそりと光を放つ三日月が、暗いだけの夜空を優しく彩つて。

冬休みの序盤、僕はまったく進まない宿題を放置、毎日をだらだらと過ごしている。

ふと、終業式以来会っていないクラスメイトのことが頭に浮かんだ。あまりの寒さに、部屋に戻りそうになった。けれど、どうしてもここにいなければいけないような気がする。

首を振り、視線を空へと戻す。そこには相変わらず闇とわずかな光があつた。

「あ……」

今、ほんのちょっとだけ切なくなつたのはどうしてだろう? — 瞬、誰かが心の中で微笑んだような気がした。

「ふう」

肺に溜まつた息をそつと吐き出せば、それは真っ白く凍り付いてすつと闇へ溶け消える。

現在時刻は午後九時半。

まだ雪が降らないこの地域。いつもクリスマス三日前まではイルミネーションが輝いているのに、当日になると一斉に電球が切れる商店街。そしてその代わりと言わんばかりに点滅を開始する街路灯。毎年同じで、いつまでも変わらないこの風景に涙さえ感じてしまう。

感じてしまつけれど、そろそろ町を見下ろすのに飽きてきた。

また、闇を見上げる。

視界には、空気が澄み渡つてゐる夜空がさつきと変わらず広がつてゐる。切なさを混ぜた視線を遠くへ投げれば、薄つすらとした山の輪郭が見えた。今は闇と同化した濃緑の山。午前では見られない新しい木々の姿は、威風堂々としていてとても感動する。風が吹き、思い出したように寒さが体中を駆け、ぶわっと鳥肌を作つた。

綺麗な夜空、濃緑の山。そこに、どこか懐かしい真紅の物体が浮かんでいる。

あれはなんだろう？

とても優しい記憶に、じばりく言葉を失つた。

沈黙の中、謎の物体は落下を続行。僕と未確認浮遊物体との間隔は、わずか数十メートルまで縮んだ。

そしてあと三三十メートル、二十三メートル、十五メートル

「たつだいま
！」

僕の中で、何かがはじけた。

開かれる記憶の扉。

そう、彼女の名前はクロス。

一年前に振つてきた、サンタの少女だ。

魔法を使つたり、とびなわで戦つたりと、ちょっと不思議な女の子。

そして、我が家にとっても大切な

「おかえり、クロス！」

居候でもある。

また、楽しい生活が始まつた。

完

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3583c/>

聖なる夜と落とし者っ！

2010年11月17日14時21分発行